

# Some effective ways to manage presentations in EFL Communication

## 英語による口頭発表への道を開く

井筒勝信／小熊 猛／金 容澤

北海道教育大学／人間文化学部国際コミュニケーション学科／ジョージア工科大学

### 0. はじめに

以前の拙稿(2019)で筆者らは、RCG(Radical Communicative Grammar)と称する考え方に基づいて、日本語・韓国語といった東洋語を母語とするEFL学習者が英語のスピーキング技能を効果的に身に付けるための有効な手立てを提案した。一般的な言語観ないし文法観に立てば、口頭によるコミュニケーションを交わす話者たちは対話(dialogue)を行う合間に何らかの独話(monologue)を行なうものと理解されるのが普通である。こういった考え方には「対話を構成する発話こそが会話の本質であり、独話を構成する部分は本来会話にとって余分な発話であるとする見方」(p.33)が強く働いていると思われる。これに対して、RCGは「会話とは独話を続ける合間に対話が行われることによって成り立つ」(p.33)とする立場を取り、話し手と聞き手双方の役割を行ったり来たりする話者たちは、発話中であるかないかに関わらず、何らかの思考を続け、それを対話的・独話的に言語化しているという事実を筆者らは着目した。

拙稿は、話者たちが語用論的標識を用いて自らの思考の一部を「実況中継」することで独話的な発話を行い、聞き手と共有したいと思う内容を選んで言語化することで対話的な発話を行う様子を例示し、RCGの見方に依拠することで「会話というものの本質と現実的な有り様」(p.34)が捉えられることを論証した。具体的には、「EFLの学習者が語用論的標識を適宜自由に操れるようになることで会話を継続する技能を身に付けることが出来、伝達内容を紡ぎ出す上で原初的な文法的単位となる代名詞と助動詞(ないし動詞)からなる、ひとまとまりの主(助)動句を駆使することに慣れることで、英語コミュニケーションの基本的な運用力を獲得することが出来る」ことを指摘し、RCGの初歩的な要素は口頭による英語コミュニケーションの重要な基礎をなすことを改めて強調した。

本稿は、RCGの考え方を敷衍し、EFL学習者にとって有用な、より応用的内容を提示することを目的とする。口頭による英語コミュニケーションは、

「会話(conversation)」と「発表(presentation)」の二つに大別することが出来る<sup>1</sup>。前述の拙稿は主として会話を扱ったものであったが、本稿では発表を主な対象とし、EFLの学習者が適宜操ることによって英語での口頭発表が行え、また駆使することによってそうした発表に伴うちょっとした質疑応答が行えるようになると筆者らが考える具体的な表現と基礎的な文法の活用法を示し、その実用性を例証する。

### 1. Radical Communicative Grammarと「出来合い」の表現

そもそも「発表」と「会話」は、いずれも聞き手の存在を前提として「話す」ことを意味するものではありながら、その根本的な機制が思いのほか異なることを認めざるを得ない。発表は人前に出て話すことを含意するのに対して、会話は一般にそのような含意を伴わない。母語での発話を考えた場合、発表は会話よりも遥かに緊張を伴うもので、それゆえ会話より発表の方が苦手だと自認する人も少なくないようである。また、発表では話す内容を予め準備しておくことも想定されるが、会話では多くの場合そのような事前準備が期待されていない。発表においては、準備した通りに話せているかどうかという評価が話し手自身の中に働けば、先に触れた緊張の度合いは一層高まる状況が想像される。

前節で見たように、会話は優れて対話的(dialogic)であるのに対して、発表はいわゆるQ&Aセッションに至る前の段階では、もっぱら独話的(monologic)であると見て差し支えはあるまい。この点は、「対話を構成する発話こそが会話の本質であり、独話を構成する部分は本来会話にとって余分な発話である」のか、「会話とは独話を続ける合間に対話が行われることによって成り立つ」(筆者ら2019: 33)のかという問題を度外視しても異論のないところであろう。それと同時に、発表に現出する独話性は、会話のままに表出する独話的性質とは本質的に区別される必要がある。と言うのも、同じく独話的発話を体現する役割を担うとはいえ、

会話と発表とでは、語用論的標識の使用に一定の違いが見られるからである。

例えば、母語を用いた簡単な「発表」を求められた場合を想像して見て頂きたい。ここで言う簡単な発表には、「一言」、「ご挨拶」、「スピーチ」、「経験談」、「小話」、「余話」、「こぼれ話」など様々な名称で呼ばれて来たものが含まれ得る。試みに中学生ないし高校生が授業中にクラスメートの前で何についても良いので30秒ほど話をしてみてと言われた場面を考えてみよう<sup>2</sup>。先生に指名された生徒は、やおら立ち上がって前に進み出たかと思えば、頭を掻くか、顎や頬を撫でるか、あるいは腕を組むか、腰に手を当てるか、そうでなければ虚空を見上げるか、はたまたぐり聴衆を見渡すかでもしてから、ようやく発声して見せるかもしれない。その声は、「えー」や「あー」のこともあれば、「どうも」のこともあろう。あるいは「えーっと」のように「えー」を少し伸ばしてから引用の「と」を加えることもあろう。いずれにしても、その発声を聞いて聴衆は「あ、いよいよ話すんだな」と思うであろう<sup>3</sup>。

これは filler と呼ばれるものの例で、広義の語用論的標識 (pragmatic marker) に属すると考えられる。接続表現を中心とする談話標識 (discourse marker) と異なり、これら filler は大した意味を表さない音 (それでも言語音) が無秩序に仕方なく発せられているだけのように思われるかもしれないが、実際はそうでもない。当該の場面で「えーっと」は可能だが、「あーっと」や「どうもっと」は不適切である。つまり、「えー」、「あー」、「どうも」は、いずれも単体では可能だが、「と」を後に伴うことが出来るのは「えー」だけであるというのが言語使用に依拠した (“usage-based,” Barlow 2000: 317) 見逃せない観察と言えよう。ここに働いているのはある種の文法であり、無秩序・無作為に用いられているものとは見なしがたい。実際、「えーあーのーどうも」、「あーのーえーどうも」は聞いて差し障りないが、「えーどうもあーのー」、「どうもえーあーのー」や「どうもあーのーえー」は、「どうも」の後に休止 (pause) がないと不自然に響かないだろうか。形態・統語的な規則が作用していると主張することは大袈裟であるとしても、ここに語順と呼ばれる現象と類似したものを見出すことに無理はないと思われる。

ここで素描した語用論的標識は、「会話」においても、それに従事する話者が初対面であったり、改めて対話を始めたりする場面では現れ得るもので、その連鎖にかかる制約も類似しているように見える。しかし、「発表」ないし「会話」が始まり、進行して行くに連れて、仮に話者が言い淀むようになった状況を想像して頂きたい。その度に、「えー」、「あー」、「そのー」、「まー」、「何だろう」、「何だっけ」、「えーっと」、「何て言うか」、「そうだなー」などの標識を用いる頻度が上がれば上がるほど、発表においては聞きにくく、目的に見合った活動が出来ていないという印象を与えやすいのではないだろうか。これらの言い淀みの多用は、発表においては評価の低下に繋がると思われるが、会話においてはそこまでの評価低下を伴わないと思われる。口下手であるとか、母語話者として流暢で雄弁な話し手ではないとの印象を与えることはあっても、発表の場面でのような否定的評価の判断にまで傾くことは少ないであろう<sup>4</sup>。

英語においても、同様な観察が得られる。上記のような「発表」の場面において、クラスメートの前に立った生徒が *Well...* ないし *So...* あるいは *OK...* と高低差のある下降音調 (falling intonation) で発すれば、そこでもやはり聴衆は「いよいよ話し出すのだな」と思うであろう。あるいは *Hi uhm...* と始めることも十分あり得るが、*Hi well...* は不自然に響くであろう。同様に *Well uhm...* や *So uhm...* や *OK uhm...* は可能だが、*Uhm well...*、*Uhm so...*、*Uhm OK...* はやや差し障りがあるであろう<sup>5</sup>。ここにもやはり語順と呼ばれる現象に似た何らかの文法が働いているものと見る事が出来る。また、発話が進行するに連れて、しばしば話者が言い淀むようになり、その都度 *uh...* や *uhm...*、*so uhm...*、*a-nd uh...*、*you know...*、*I mean...*、*what can I say?*、*how can I say it?*、*what was that?* などの語用論的標識が多用されるということは英語でも見られ、そうした多用に対する話者評価は、日韓語の場合と同様の傾向を示す。

「発表」と「会話」で語用論的標識の使用に差異が見られるのは、聞き手 (聴者ないし聴衆) の側が予想ないし期待している言語行為の違いによるものと考えられる。会話においては、言語によって程度の差こそあれ、聞き手がいわゆる相槌に相当するような表現 (“backchannel”) あるいは更に広く話し手に対する何らかの反応を示す表現 (“reactive

token”)を用いて、話し手に耳を傾けていること、それをある程度理解していること、明確な反論はないことなどを暗に伝えることが期待される(Clancy et al. 1996: 356)。対照的に、発表においては、同様な反応を示すことは皆無とは言えないまでも、視線(eye gaze)や眉の動き(brow raise)、眉間に皺を寄せたり(frown)、笑顔を作ったり(smile)、首を縦ないし横に振る(head nodding or shaking)、肩をすくめて見せる(shrug)などの動作によって示されるのが普通である。つまり、よほどの驚きや強い反感ないし共感を殊更示そうという意図がなければ、backchannelであれ reactive token であれ、避けるというのが(わきまえのある大人としては)一般的であろう。

このように、会話では聴者の側が盛んに反応することが期待されているため、仮に話者が話し続けることに困難さを感じて、fillerを中心とする語用論的標識を盛んに用いたとしても、聴者の側はbackchannelないし reactive token といった語用論的標識を盛んに用い返すことで、会話という全体の言語活動を先へ進めることが出来る。それに対して、発表において話者の発話そのものが滞ってしまうと、当該の話者の発話に大きく集約されている言語活動全体が先へ進まなくなってしまう、大きな支障をきたす。そのため、先に見たように filler などの語用論的標識を多用する発話が続くことは話者に対する評価を下げる結果を招くものと推察される。

これら語用論的標識の使用に関して日英語に共通して見られる「発表」と「会話」の差異は、そこで用いられる具体的な表現と(時にそれらを連鎖させるなどして組み合わせるための語順に相当する現象を司るものとしての)文法として扱うことが可能である。それゆえ、「発表」で典型的に用いられる具体的な表現とそれらの使用に働いていると思われる機制(大まかに語順整序に関わる文法的な特徴)をつぶさに捉え、示すことで、EFL 学習者に英語での口頭発表実現の道を開くことが出来ると筆者らは考える。ここで言う具体的な表現は、多くの場合、母語話者の中では発話の際に、その都度、形態素から組み立てられるものというよりは、いわば「出来合い」(“prepatterned, prefabricated,” Hopper 1998: 167)の形式として認識されている。また、それらを連鎖させたり、組み立てたりする作業は、いわゆる線状的な過程(“on-line emergence,” Auer

2009: 2)として実行されるのが常である。

それゆえ、“Communicative Grammar”(Leech and Svartvik 1994)と呼ばれる枠組みは、形式偏重の統語論に一般的な変項(variable)を多く用いた代数的表記や、一般化を強く志向した概念的文法論に見られるような抽象的な図(figure)を用いず、話し手の意図や聞き手の推論といった語用論的ないしは談話機能的な特徴付けと典型例の提示という記述方法を採用する。本稿が標榜する RCG も、Communicative Grammar の一つとして同様の方法を採用する。従って、ある程度の一般化として、そこから取り出される機制に相当するものは、半ば出来合いの句と見なし得る要素の線状的な語序として、緩やかに特徴付けられる<sup>6</sup>。

## 2. 英語で発表を始める

それでは、主として簡単もしくは手短な発表を英語で出来るようになるための具体的な表現とそれらの語序に関わる機制について論じることに取り掛かりたい。本論では便宜上、対象となる「簡単もしくは手短な発表」に関わる言語活動を「始める」段階と「進め、終える」段階の二つと、いわゆる質問や意見を受け付ける段階(Q&A or discussion session)の三つに分けることとし、本節ではそのうちの最初の段階を扱うことにする。以下では、特に断りがない限り、前記の例のように中高生もしくは大学生が主に学校で簡単もしくは手短な発表をする場合を想定するものとする。

### 2.1 始めの一言(pragmatic markers as fillers)

発表を任せられた学習者が直ぐさま雄弁に語り出すということもないとは言いきれないが、1節で紹介したように、発表の本体(main body)と見なし得る内容について語り出す前に、戸惑ってみたり、はにかんで見せたり、聴衆の様子を窺ったりしてから、あるいはしながら filler 相当の語用論的標識を発するのが一般的であろう。その傾向は、韓国語話者よりも日本語話者の EFL 学習者により多く見られるものかもしれない。筆者らが担当して来た授業での経験に関する限り、そうした場面で最も多く見られるのは、日本語の *ee*, *etto*, *ano*, *maa*, *sono*, *nanka*, *nanteiuka*, *nanteitaraikana*, *dooitaraikana*, *nandakke*, *nandaroo*, 韓国語の *eo*, *jeo*, *issjanha geu*, *mweonga*, *mweoyeossji*, *mweoyeossdeora*, *mweoji*/

*mweoralgga, mweora(go)ha myeon joheulgga, mweora haeya joheulgga, mweorago haeya dwaaji* であるように思う。そうした言い淀み、言い迷い自体も英語で発するという学習者は僅少であるというのが偽らざる印象である。

この手の語用論標識を話し始めに用いることは、「発表という場 (presentation setting)」において、母語での学習活動を想定した場合には、決して推奨されはしない。この点は、「会話の場 (conversation setting)」においてよりも顕著で、それゆえ、日本や韓国の学校で発表の仕方を学ぶ場面において積極的に filler 相当の語用論的標識を教えるということは考えにくい。実際に発表をさせられれば、学習者の口から自然と溢れ出すもので、寧ろそれを禁じることが困難であろうとすら思われる。英語でも事情に大差はなく、発表の練習をするという場面で学習者が避け難く発してしまう語用論的標識は、なるべく避けるべきものとして指導されることはあっても、使い方を教わるといったことはない。しかし、EFL 学習者が英語で発表しやすくなるための方略、ひいては英語が話しやすくなる工夫としては、寧ろこうした語用論的標識を使い慣らすことに一つの手掛かりがあると筆者らは考える。

先の話し始めの場面で、日韓語の学習者が発しがちな標識と類似した意味ないし機能に用いることが出来る英語の表現には、*uh, uhm, well, like, you know, I mean, let me see, what can I say* などが考えられる。これらは、情報伝達上の機能を有しているというよりも、話し手の情動的な動きを言語化しているに過ぎず、それゆえ聴衆にとっては本来不要なものとも考えられるが、それと同時に「沈黙を決め込まれるよりはマシ」と受け止められる可能性が高い。とりわけ日本語話者の学習者に見られる傾向かもしれないが、発表を任されて前に出た後、しばらく沈黙が続くという状況は決して珍しくはない。そんな状況が長引けば長引くほど、聴衆にも気味な空気が流れ始め、発表者の方もそれを感じ取るほどに一層話し出しにくくなりかねない。

上記の英語表現を用いて場をつなぐことが出来れば、本題への入り方を頭の中で模索する時間的余裕が発表者に生まれ、また聴衆の側も英語を話す発表者に安心して耳を傾けることが出来る。ここでは、いわば時間稼ぎのような目的で語用論的標識が用いられているわけだが、言い淀み、言い迷いと言えど

も立派な英語の発話であるという点を再認識する必要がある。このようにして学習者は英語で発表をする端緒に着くことが出来る。つまり、言い淀み、言い迷いの語用論的標識に使い慣れることで、「始めの一言」を手に入れられるというわけである。

## 2.2 いよいよ発表を始める (speech starter)

前節では、発表の本体に入る前のいわば助走のような発話について述べた。それでは、「ここからが本題です」と言わなければ話し始める際の具体的な表現にはどんなものがあり得るだろうか。1節の例で言及したように、日本語では差し詰め *etto* を用いるのが便利そうである。その場合、用いられるイントネーションが肝心で、平板に発した *etto* には、発表者の「始めるぞ」といった意気込みは感じられない。まだ、どう始めるか幾分惑いながらも、とりあえず声は出してみますといった雰囲気である。それに対して、*eet-* の部分をかなり高めの声で真っ直ぐ始めて、*-to* と発した直後に急激な下降音調に転じれば、「さて、始めますよ」という息遣いが伝わって来る<sup>7</sup>。

英語でも同様に、言い淀み、言い迷いの語用論的標識に比べて「さて本題に入りますよ」というニュアンスが出やすい表現が幾つか挙げられる。*OK, All right, So* がその代表的なもので、やはり1節で指摘した通り、高低差のはっきりした下降音調で快活に発せられた場合にもっとも「発表開始の意気込み」が感じられるようである<sup>8</sup>。これらの語用論的標識を耳にすれば、英語を母語とする聴者は自然と耳を傾け、発表を聞く準備をするよう言語的に条件づけられているとすら見ることが出来るかもしれない。例えば、教室に先生が入って来て生徒の前に立ち、これらの標識を当該のイントネーションで発すれば、生徒はすべからず先生が何かを話し出すことを予期して注目すべきものと感じ取るであろう。

さて、この「いよいよ発表開始」のアナウンスを発した後、話者はどのようにすれば、その先を首尾良く続けることが出来るだろうか。理論的にはもちろんのこと、実際にも、その方法は無数にあり得る。しかし本稿が依拠する RCG は「実用性に加えて学習の即効性をより一層重視する」(筆者ら 2019: 25) ことから、そこで用いる具体的な出来合いの表現を幾つか (a few or several) に絞り込む。そして、学習者がそれらのうちの一つを選び取って用い、

口を衝いて出る程度にまで使い慣らすことで、目標とする言語活動が実現出来るところへ漕ぎつけようとする。該当する英語の表現は、(i) *I'd like to talk about...*、(ii) *Let me talk about...*、(iii) *(I think) I'll talk about...*、(iv) *(I think) I want to talk about...* の四つである<sup>9</sup>。これらは、先に例示した語用論的標識に対して、speech starter とでも呼ぶことが出来る<sup>10</sup>。言い淀み、言い迷いの標識の後、開始アナウンスの標識を経て、ようやく、これら speech starter を用いることによって、発表を始めることが出来る。

## 2.3 聞き手を巻き込む (audience involver)

発表を始めることに成功した話者は、引き続き聴衆を惹きつける必要があるかもしれない。程なく聴衆の注意や関心が潮のように引くのを感じ取れば、話者の発表継続の意思も揺らいで来かねないからである。そのためには、聴衆が前提とすること、予測することに一旦寄り添うことが有効である。丁寧さ (politeness) の観点から言えば、*you* を用いて聴者に話しかける (e.g., *Would[Could] you give me...?*) よりも、用いない (e.g., *Can[Could] I have...?*) 方が望ましいという場合も少なくない<sup>11</sup>。しかし、聴衆に働きかけるといふ点では、*you* を用いる方が効果は高い<sup>12</sup>。

例えば、アメリカに短期の語学研修に行ったことのある EFL 学習者が *candy bar* を話題に選んで、やはり EFL 学習者である聴衆に向かって発表をすらしよう。まず speech starter を用いて *Let me talk about candy bar.* と始めた後、引き続き (i) *Do you know (some about)...?*、(ii) *Have you ever heard (about)...?* などを用いて尋ねることが出来る。この場合、... の部分に *it* を用いることも出来るが、再度、*candy bar* と言い直した方が聴衆には話題として意識しやすいだろう。更に、(iii) *You may think it's...* などと続けて更に聴衆の前提や予測に寄り添った後、*But it's not.* のように予想を覆せば注意や関心を継続させやすくなる。これら (i)-(iii) のような表現を audience involver と呼ぶことにしよう。

類似した機能は、(iv) *It sounds like (it's) [We can imagine] something like...* のような表現でも果たし得るが、聴衆からすれば、話者がひとりごちて自らの前提や予想を一方的に語っているように聞こえなくもない。寧ろ、audience involver として用いるには、*doesn't it?/isn't it?* や *can't we?* のような tag を

追加したいところである。ここで注目すべきは、tag の添加によって出来る上がる表現が上記 (i)-(ii) と同様に疑問文であると言う点である。つまり、audience involver は、その原理を聴衆指示の *you* と疑問文に求め得るものである可能性が強く示唆される<sup>13</sup>。

## 3. 発表を進め、終える。

話題を導入し、それを展開する段階では、いよいよ具体的な内容を語って行くことになるが、この作業は端的に言えば話者の持つ知識や情報を聴衆と共有することに当たる。また、これには、発表の動機を示し (motivating the talk)、背景を略述する (outlining the background) といった内容が含まれ得る。学問ないし商業的な目的 (academic or business purposes) の発表であれば、個人から切り離された (俗に客観的とされる) 「知識の共有」が志向される。一方で、本論が第一に想定する「簡単な発表」では、そうした話し手や聞き手から切り離された説明は、聴衆を退屈させる危険性を孕む。寧ろ、個人と密接に結び付いた (俗に主観的とされる) 「経験の共有」の方が聴衆の関心を維持しやすいように思われる。以下では、最初に「経験の共有」について扱った後、「知識の共有」の典型として「図表の解説」を取り上げる。これらについて論じた後、「発表の締めくくり」を扱う。

### 3.1 経験を共有する (sharing experience)

経験は本質的に過去志向であるので話者が自らを参照して時間的場面設定をするのが一般的である。日本語の *kodomo[*(syoo/tyuu/dai)gaku[kookoo]see/zyuunanasai-no-koro/toki, (mada) tiisai [osanai/wakai]-koro/toki, ...nen(-kurai/hodo)-mae(-ni)**、韓国語の *chodeung[jung/godeung/dae]hagsaeng(-ieoss-eul)-ddae, yeoilgob sal(-ieoss-eul)ddae, eoryeol[jeolmeo]ss-eulddae, ...nyeon jeongdo jeon-e, ...nyeon jeon-jeum-e, yag...nyeon jeon-e* などは、そうした時間設定の表現 (temporal “space-builder,” Fauconnier 1994: 17) である<sup>14</sup>。英語では、*when I was a child [elementary[(junior/senior)high] school student], when I was at college[university/elementary[(junior/senior) high] school], when I was young(er)/little/small/seventeen (years old)* のように表現される<sup>15</sup>。

先の *candy bar* を話題にした発表なら、*When*

*I was a high school student, I went to California and studied English in a language school. One day I wanted to eat chocolate and went to a nearby store.* のようにごく易しい過去形の動詞句を連ねることが出来るだろう。二文目の最初に用いた *One day* は、更に時間を絞り込んだ temporal space builder であると同時に、話者自身の経験談という性質上、いわゆる歴史的現在に切り替えることが容易になることは注目値する。次のように話を続けたとすれば、四角括弧に入れた過去形で語るのと同様、現在形で語ることも出来、その方が生き生きとした場面を描けるという側面もある。それは、過去形を考えずに動詞を選んで口に来ることから、EFL 学習者にとっては認知的な負担が小さいと言う点も利点となろう。

- (1) *I walk(ed) in and look(ed) for chocolate but I can't [couldn't] find any. So I ask(ed) a shop clerk, "Where is chocolate?" So he takes[took] me over to a shelf and says[said], "Here you are." But what I see[saw] is[was] COCOA. You know what I mean? I don't want to drink cocoa. So I say[said], "Sorry, this is not what I want. I want to EAT chocolate." And then he said, "Ah, a candy bar" and he showed me where candy bars were.*

このような語りの中で現在形相当の表現を用いることは、(2)のように日本語や韓国語でもある程度は可能であろう。このような現在形語りは、幼児や幼い児童が絵本やその読み聞かせで接する言葉遣いにも近く、母語話者的な表現力を養うのに寄与すると思われるが、この点は日韓語に限らず英語にも当てはまる<sup>16</sup>。

- (2) 店に入ってチョコレートを探しますが見つかりません。それで店員に、「チョコレートはどこですか」と尋ねると、棚まで連れて行ってきて、「ここです」と言います。ところが、それはココアなんです。なんと。ココアなんか飲みたくありませんから、私は「ごめんなさい。これじゃないんです。私はチョコレートが食べたいんです」と言いました。すると、「あー、candy bar ね」と言って、食べるチョコレートのコーナーに案内してくれました<sup>17</sup>。

### 3.2 図表を説明する (explaining a figure or table for sharing knowledge)

「知識」は「経験」からも得られ、その共有は3.1節で扱った「経験の共有」と不可分のものとも言える。そこで、「経験の共有」とは明確に区別される、より客観化された「知識の共有」の形態として「図表の解説」を取り上げる。インターネットで様々な検索がしやすくなった現在では、生徒、児童、学生が統計的な資料を見つけて、そこから得た知識を教室で共有するという形の学習活動も増えつつあると思われる。表 (table) や図 (figure)、円グラフ (pie chart)、棒グラフ (bar chart)、折れ線グラフ (line chart) などを提示して、そこから得た理解を発表する場合を考えてみよう。

多くの場合、先ず *koko-ni zu[hyoo/gurahu/tookeesiryoo]-ga arimasu, kono-zu[hyoo/gurahu/tookeesiryoo]-o mite kudasai, yeogi-e geurim-i[(do)pyo[geuraepeu]-ga] iss-seubnida, i geurim-eul [(do)pyo[geuraepeu]-reul] boseyo* と言って示し、何についての統計かを知らせた後、その内訳に言及するという具合に進行する。そして、*sekai-no ninki SNS rankingu-desu[-o arawasiteimasu], segye-eui SNS ingi raenking-ibnida[-reul natanae[boyeo ju]-go isseoyo]* の後、*riyoosya-wa Facebook-ga mottomo ooku(-te), YouTube, Instagram nado-to tuzukimasu, sayongja-neun Facebook-i gajang manh-go YouTube, Instagram deung-eui sunseo-yeoyo* のように続く。

英語では、*Here is [Here we have] a table[figure/chart/graph/diagram]. It shows the world's most popular social network services. You can see that [As you can see,] Facebook has the largest number of users, and it is followed by YouTube, Instagram, and so on.* 程度になろうか<sup>18</sup>。本論が想定する EFL 学習者の場合、文章での説明に用いるような難しめの語 (big words) は避け、先ずは平易な表現に使い慣れることが大切である<sup>19</sup>。ごく基本的な比較の表現、数量変化の表現を絞り込んで、*Twitter has a (much) smaller number of users than LINE (does).* や *The number goes [went] up[down] rapidly[gradually/slowly/steadily] after 2010.* や *There is[was/has been] a rapid[gradual/slow/steady] rise[growth/increase/fall/decrease/drop] between 2015 and 2019.* のように表現することが出来れば、多くの統計資料を前に口頭で略説出来ることになる<sup>20</sup>。

日韓語で *nihon-de-wa LINE-ya-Twitter-(nohoo)ga Facebook-yori(mo) ninki-ga ari-masuga, kankoku-de-wa*

dore-mo Kakao Talk hodo[noyooni] ninki-ga arimasen や ilbon-eseo-neun LINE-ina Twitter-ga Facebook-boda ingi-ga iss-seubnida-man, hangug-eseo-neun eoneugeos-do Kakao Talk-mankeum[cheoreom] ingi-ga manh-ji-neun anh-ahyo[seubnida] と言うのが普通である<sup>21</sup>。英語でも、*LINE and Twitter are more popular than Facebook in Japan, but in Korea, Kakao Talk is far more popular than any of those.* のように、それに近い言い回しは可能である。この場合、対照される要素を *but* の直後に置くことで表現出来るが、最初に *In Japan* を発するか、それを *If we talk about [When it comes to] Japan* のような長めの句にすることで、二カ国の対比は一層はっきり表現される<sup>22</sup>。かくして発表者は、国によって SNS メディアの好みに違いがあるという理解を聴衆に伝えるということを実践しつつ、客観的な資料を用いて知識を共有するための具体的な方法を学ぶことが出来る。

### 3.3 発表を締めくくる (concluding the talk)

当然ながら、3.1節に例示した「経験の共有」であれ、3.2節で示した「知識の共有」であれ、伝えるべき内容を伝えた後は、要するに何が言いたかったのかが聴衆に理解されていることが発表としては期待される。そのためには、今一度内容をまとめるような発話があると、発表が締めくくられやすくなると思われる。日本語や韓国語なら、*toiu [sonna] wakede...、sonnahuunisite...、konoyoo[konnahuu] nisite...、geureon sig-eruro、geureohge haeseo* と語りを立ち上げ直して、アメリカではただ *chocolate* と言ってしまうと、ココアを指してしまうこともあり、*candy bar* と言った方が食べるチョコレートと認識してもらえということを知ったのでしたといった具体的に失敗談として締めくくることが出来よう。英語では、*This[That] (experience) taught me that...、This[That] (experience) made me know[find/learn] that...、That was the moment (that) I first knew [learned] that...* のように言えば同様な締めくくりを伝えることが出来る<sup>23</sup>。

聴衆が EFL 学習者である場合には、話に落ちがついたことに気付かない聴者がいるということも往々にしてある。そのような聴者が多ければ多いほど、発表者は「終わったんだけどな」、「話が伝わらなかったかな」と不安になる。発表の最後を迎えて、そんな微妙な空気を味わうことは、ほんの一時

とはいえ、発表を買って出た話者としては出来るだけ避けたいものである。それに役立つのが、*speech starter* の反対の役割を果たす *talk closer* であろう<sup>24</sup>。日本語では *izyoodesu、(korede) owarimasu、* 韓国語であれば *isang-ibnida、isang-euro balpyoreul machi-gess-seubnida* などがその代表格であろうか。英語では、*That's all (I wanted to say[talk about/tell you])* が分かりやすく、使いやすいただろう。幾分ぶっきらぼうなニュアンスが否めないが、*That's it.* も可能であろう。

こういった *talk closer* が聞こえたら、EFL 学習者といえども発表が終わったことを理解し、よほど「つまらなかった」、「意味がわからなかった」ということがない限り、自発的な拍手でも出ようものである。それに応えて *Thank you (for listening[your attention[patience]])* などと答えることが出来れば、発表者も決して悪い気はしないはずである。筆者らの教室での経験からすると、ここまで漕ぎ着けた発表者は大概意気揚々と自分の席に戻って行こうとするものである。ただし、彼らはまだ席に戻るものと想定されていない。次節で扱うように、この後、発表を共有することが期待されるからである。

## 4. 発表を共有する

発表者の話が終わった後の「発表の共有」とは、英語で Q&A session や discussion session などと呼ばれる営みのことである。それまで一人語っていた話者が俄かに聞き役に転じ、それまでもっぱら聞き役であった聴衆の中から新たな話し手が登場することになる。従って、ここでは主に、発表中は聴者であった人の言語活動を扱うことになる。質問をしたり意見を述べたりするというのが主な内容だが、便宜上、それらに付随する謝辞についても触れることにしたい。

### 4.1 発表者への謝辞 (acknowledgement to the presenter)

筆者らは、学会での研究発表などに参加する中で、口頭発表の後に聴衆の何人かが質問をしたり意見を述べたりする姿を数多く見て来た。そんな際に、好感の持てる質問者とそうではない質問者というのが存在することも心得ている。その違いは、もちろん発言の内容そのものに加えて、発言する際の身振り・手振り、口振りや声音、言葉の丁寧さな

ど多岐に渡るが、ここで取り上げたいのは、いわゆる謝辞の有無である。質問が手厳しいものであったり、述べられる意見が批判的なものであったりしても、「興味深く聞かせて頂きました」の一言が最初に添えられていれば、発表者も他の聴衆も、発言者を好感の持てない人とは断じないだろう。

文化の違いもあろうが、この点は英語において一層顕著である印象を受ける。かく言う筆者らも、英語での口頭発表の場数を踏む中で、自然と身に付けるに到った感覚であって、知識としてどこかで改めて教わったことではない。聴衆から名乗り出た発言者の中には、手を挙げて指名された傍から質問や意見に入るという人も良く目にする。発表内容に興味があればあるほど、そのような傾向は高まるのかもしれないが、少なくとも北米や西欧の英語を媒介とした口頭発表や講演という場においては、*Thank you (for your (interesting) talk[presentation])* . 程度の前置きはごく普通に発せられるように思う<sup>25</sup>。日本や韓国の国内学会でも、*arigatoo gozaimasu[gozaimasita]*、*gomabseubnida*、*gamsahabnida* の前置きをする発言者は少なくないのかもしれないが、もう少し長めの定型句となるとどうであろうか。

英語では、利用可能な表現にもう少し広がりがあるように思われる。謝辞としては、*Thank you for sharing your story[experience/ideas/opinion] (with us)* . というのも可能である。理解した話の趣旨に言及して、*I was (very) interested in your talk about....*、*I enjoyed your[the] talk[story] about....*、*Thank you for telling us your story about....*、*Thank you for sharing your talk[story/experience/ideas/opinion] about....* とすることで、聞き手としての理解を示すことが出来る。当然、後者の表現を用いた方が、発表者としては自らの話が理解されたという印象を受けるに違いない。

#### 4.2 内容確認 (clarification question)

発表を聞く中で新たに抱くに到った疑問点、更に知りたいと感じた点について尋ねるのではなく、あくまでも発表者の話の中で聞き取れなかったこと、良く理解出来なかったことについて確認をしようとしてする質問は、clarification question ないしは clarifying question と呼ばれる。ここでは発表が終わった後の質問を想定しているので、聞き取れなかったこと、良く理解出来なかったことに関係するくんだり文字どおり (verbatim) には覚えていない

ということもあろう。そのような場合は、こんなことについての部分だったと思う内容に言及して *-nituite hanasareteita [-nituite-no ohanasi-ga atta(ka)] -to omoundesuga*、*-edaehaeseo malsseum[eongeub] hasyeoss-dago saengag[gieog]ha-neunde* のように導入した後、*sore-nituite mooitido ohanasi[gosetumee] itadake-masenka[masu(desyoo)ka]*、*geugeos-edaehaeseo dasi han beon malsseum[seolmyeong]hae jusi-gess-eyo[seubnigga]?* のように尋ねることになる<sup>26</sup>。

英語でも同様に、*You said something about....* もしくは *You talked about....* と導入した後、*Could[Would] you (please) say that again?* あるいは *Would[Could] you repeat that(, please)?* と依頼することが出来る。聞き取った内容に自信がなければ、*I think you said something about....* や *I think you mentioned[talked about]....* と導入してから *Could[Would] you say that again(, please)?* あるいは *Would[Could] you (please) repeat that?* などと尋ねても良からう。

発表者によって語られた内容そのものではなく、発表者の意図を確認したいと思う場合もあろう。その場合には、*You said[mentioned] that....* などを用いて、文字どおりではないにしても、発表者が語ったと思われる内容を大まかに繰り返した後、*Is that...?* や *Are you saying that...?* もしくは *Do you mean that...?* などの表現を用いて、発表者の意図として理解ないし推測した内容を提示してみると良からう。もし、その意図が理解ないし推測し難いと思う場合には、代わりに *What does it mean?*、*Would [Could] you (please) explain what you mean?*、*What do you mean by that?*、*What are trying to say by that?* のように尋ねてみるのも良いだろう。

#### 4.3 疑問共有と更なる情報の求め (sharing a question and request for further information)

発表を聞く中で新たに抱くに到った疑問点、更に知りたいと感じた点について尋ねる際には、直接、*yes/no* 疑問文や *wh* 疑問文を用いて質問をすることになる。ただし、本節が問題にしている「発表の共有」という点から言えば、*yes/no* 疑問文よりも *wh* 疑問文の方が遥かに有用であろう。Communication 論で良く指摘されるように、*yes/no* 疑問文で尋ねた場合、発表者はそれこそ *yes* か *no* に相当する答えを表明すれば事足りるため、EFL 学習者の間では、やりとりが続かないという苦境に



陥りがちである。それに対して、*wh* 疑問文で尋ねた場合は、発表者はそれなりに語って答える必要が生じる。自ずと EFL 学習者間でも、やりとりが継続的になるものである。

そこで *wh* 疑問文を用いて質問をする場合を考えてみることにしよう。ここでも質問をするというよりは「共有する」という方策が取られるのを北米や西欧では良く目にする。例えば、*You mentioned that it is not necessarily the case that...* のように論点を提示した後、*Why do you think so?* あるいは *Why can you say that?* とストレートに尋ねることは十分可能であり、それが必要な場合もある。しかしながら、*I'm (just) wondering why...* や *I was (just) wondering why...* のように、婉曲的な表現が取られることも少なくない。ここには、疑問を呈するというよりは、寧ろ、疑問点を共有するというようなニュアンスが感じられる。同じような動機から、*yes/no* 疑問文を用いることが可能な場面でも、*I'm (just) wondering if...* や *I was (just) wondering if...* のような表現が採用される傾向が一定程度見て取れる。

質問者・発言者が、これらの婉曲表現を用いるのは、先に論じた発表者が聴衆を自らの話に巻き込もうとするのと類似した動機からだと考えられる。2.3節では、話題を選んで導入した直後に、(i) *Do you know (some about)...*?, (ii) *Have you ever heard (about)...*?, (iii) *You may think it's...* などの audience involver を用いることで、聴衆の注意や関心を継続させやすくなることを論じた。これと同じように、質問者・発言者は自分の質問ないし意見を一方的に発表者に突き付け、それに対する回答を迫るという接近法ではなく、疑問や考えを共有し、「一緒に考えよう」、「共に考えたい」という態度を示すのである。そうすることによって、発表者は一方的に質問・意見を突き付けられる場合よりも、応えたいという思いを掻き立てられやすくなるものと思われる。

質問者・発言者が発表者と関わり合うという局面をしっかりと言語化するためには、*Could[Would] you tell me a (little) bit more about...?* のように、*say* や *talk* ではなく *tell me* が用いられることもある。それに対して、*I'd like to hear a (little) bit more about...* と言えば、質問者・発言者側のもう少し聞きたいという希望が、*I would like you to talk a (little) bit more about...* と言えば、発表者の側でもう少し詳しい情報を提供してくれても良からうという要求が前面に

押し出されることになる。

#### 4.4 賛意・不賛意 (expressing (dis)agreement)

聴衆から名乗り出る発言者は、質問ではなく自らの意見を披瀝する場合もある。もちろん発表者が発言者から新たな知識や経験を共有させてもらえるということもあるので、一概には言えないが、発表者の立場からすると、発言が長く続くとすれば、尋ねている内容が分かりにくい質問者と並んで手強い相手ともなり得る。そのため、発言の要点を伝わりやすくする工夫が必要であり、その手立てとして最も有力なのは、「賛成するかしらないか」、「同感であるかないか」、「共感出来るか出来ないか」ということを一先ず伝えることであろう。日本語であれば *...to-hanasarete-imasita-ga* や *...dago malsseumhasyeyoss-seubnidaman* などを用いて、発表者の考え・意見であると思われる内容を繰り返した後に、同じ立場であれば *watasi-mo soo omoimasu*、(*watasimo*) *sanee[dookan]-desu* や *jeo-do geureohge saenggaghbnida*、(*jeo-do*) *chanseong[donggeui] habnida*、(*jeo-do*) *donggam-ibnida* と言い添えれば良い。それに対して異なる立場にあれば、*watasi-wa soof(-wa) omoimasen*、(*watasi (-ni) -wa*) (*tyotto*) *sanee [dooi]-dekimasen* や *jeo-neun jom dareu-ge saeggaghbnida*、(*jeo-neun*) *chanseong[donggeui]ha-gi-ga jom eoryeob-seubnida* と言葉を継げば良い<sup>27</sup>。

ここで大切なことは、やはり communication 論などで夙に指摘されているように、単に賛成・不賛成の考えのみを伝えるのではなく、それと同時にその理由を言い添えることが肝要である。日本語でなら *toyuumono[nazekatoi(imas)uto/nazenara] ... dakaradesu*、韓国語でなら *waenyahamyeon ... giddaemun-ibnida* と表現するのが一般的である。理由を言い終えた後に、*kore[sore]-nituite(-wa) doo omowarema[ikagade]suka* や *geu[i] geos-edaehaeseo eoddeohge saenggaghasibnigga* と付け加えることで、発言者の番が一旦終わって、今度は発表者の話す番だと首尾良く伝達することが出来る。

この点は英語でも大差はなく、*You said[mentioned] that...* などを用いて、発表者の考え・意見であると思われる内容を繰り返した後に、*I think so too*、*I (totally) agree (with you)*。と言って同意するか、*I'm sorry but I don't really think so*、*I'm sorry but I have to disagree*。と言って不同意を示すことが出来る。そし

て、いずれの場合もすかさず (*That's*) *because...* と続けて、根拠を明示することが肝心である。同じ不同意の表現でも、*I don't think so.* や *I disagree.* だけでは強く響くため、その効果を意図するのではなければ、普通は弱めて表現することが好まれる。*Yeah, I could[can] understand your point[view/idea(s)/opinion], but...* や *I partially agree with you but...* などと前置きをすることも有用である。

賛成とも反対とも明確にはし難い場合には、*That's really interesting.*、*I hadn't thought about it that way.*、*That's a good point.* など御茶を濁すこともなくはない。けれども、それよりは寧ろ、*I basically [generally/partially] agree with you [I (can) see your point], but I have a (little) bit different idea[opinion/view] about[on] that [, but I think you can look at it this way].* のように言った後、自らの考えをごく手短かに表明することも出来よう。あるいは、異論を唱えた後に、*...but, basically/generally, I agree with you.* と言って、発表者との意見の衝突を和らげることも出来る。

#### 4.5 質問者への謝辞と回答 (acknowledgement and answers to the questioner)

自らの発表内容に質問あるいは意見を投げ掛けられた発表者は、それに対して何らかの回答をすることになるが、その際も開口一番は謝辞でありたい。もっとも汎用性の高い表現は (i) *Thank you for your interest in my talk.* かもしれないが、質問に対してなら (ii) *Thank you for your question(s).*、意見ならば (iii) *Thank you for your comment(s).* ないしは (iv) *Thank you for your suggestion(s).* と先ずは応答することが出来る。(i) は、日韓語とやや異なる点であろうか、文字通りの意味に近い *kansin[kyoomi]-o omo[osimes] i-kudasari[itadaki] arigatoogozaimasu* や *gwansim [heungmi]-reul bolgaj[yeo juseyoseo gamsaha[gomabseu] bnida* は、冗長でやや野暮ったく聞こえなくもない。それに対して、*go-situmon[iken/teean] (itadaki/kudasari) arigatoogozaimasu* や *jilmun[jean] (-eul) hae [euigyeon-eul malsseumhae] juseyoseo gamsaha[gomabseu] bnida* は普通に用いられる。

質問に対しては、発言者の言ったことを幾らか繰り返すことで、答えるための時間的な余裕が出来ると共に、外的な回答を避けやすくなるという利点があることが良く指摘される。具体的には、*Your questions is wh..., right[isn't it]?* あるいは *You're asking*

*wh..., right[aren't you]?* を用いることで、質問内容を簡単に繰り返すことが出来る。その間接疑問文が *whether* 句の場合 (つまり *yes/no* 疑問文の質問を受けたのなら)、*It is[was/will/can (not) ...]*、*I do[did/will/can (not) ...]* などの「主(助)動句」(筆者ら2019: 29) を用いて簡明に答えれば、*Yes* や *No* の一言しか答えない場合よりは誠意が伝わりやすい。受けた質問が *wh* 疑問文であれば、疑問詞句に該当する内容を *That's...* で導くのが簡単な言い方であろう。断定的な回答を避けたいと感じるなら、*I can[could/would/should] say* を用いて語気を弱めることも出来よう。

その一方で、意見に対しては、発言者が最初に行った(行うのが望ましいと上で論じた)ように、今度は発表者の側が少し長めの定型句を用いて発言者に対する謝辞を改めて送るということが有効である。発言者が自身の意見を披瀝したという段階に到っては、発表者と発言者の間で話者と聴者の役割が交替していると見ることが出来る。そこで、4.1節で見たような表現形式を援用して、*Thank you for sharing your idea[opinion/suggestion/advice/information/experience/knowledge].* と答えることが出来る。長めのコメントであれば、その趣旨を要約して、*I was (very) interested in your idea[opinion/suggestion/advice/information/experience/knowledge] about....*、*Thank you for sharing your idea[opinion/suggestion/advice/information/experience/knowledge] about....* のように応えることが出来る。

もちろん、投げ掛けられているのが質問ではなく意見である以上、それに対する賛否の表明が発言者からは期待され(てい)る場合もある。そのような場合には、4.4節で発表者の発言者に対する応答として述べたことがやはり当てはまる。明らかに賛成出来るのであれば、*I think so too.*、*I (totally) agree (with you).* と言って同意を示し、賛成しかねるのであれば、*I'm sorry but I don't really think so [but I have to disagree].* と言って不同意を示すことが出来る。ここでもやはり (*That's*) *because...* と続けて、根拠を明示することが期待されるので、先取りして、根拠となる考えを提示してしまうことも一つの選択肢である。そのためには、*I could[can] understand your point[view/idea(s)/opinion], but...* や *I partially agree with you but...* などと前置きしてから、自らの考えを提示することが出来る。

また、やはり4.4節で指摘したように、賛成

とも反対とも決めかねる場合には、*That's really interesting, I hadn't thought about it that way, That's a good point.* などで御茶を濁したり、異論を唱えた後に *...but, basically/generally, I agree with you.* と言うことで、発表者との意見衝突を回避することが出来る。究極的には、*Let's agree to disagree.* と言って締めくくる方法もあるという<sup>28</sup>。残念ながら日韓語にはこれに相当する表現は見当たらない。

## 5. おわりに

英語で発表をする方法やそのための表現をまとめた記事や指南書がホームページや出版物の形で存在するが、それらの殆どが学問ないし商業的な目的 (academic or business purposes) の発表を対象としているようである。本論が主な対象とするような「簡単な発表」(一言、ご挨拶、スピーチ、経験談、小話、余話、こぼれ話など様々な名称で呼ばれて来たものが含まれ、小・中学生、高校生ないしは大学生が授業中に教室の前に出て30秒ほどで披露するような話)で英語を駆使出来る力を養うためのガイドや参考書は一般的ではないという印象を覚える。そこで本論では、筆者らが別稿(2019)にて会話について実践法を展開したRCG (Radical Communicative Grammar)に基づいて、EFLの学習者が英語で「簡単な発表」を行い、それに付随する質疑応答などのやりとりを行うことを可能にする具体的な表現と基礎的な文法を示し、その活用法とその実用性の例証を試みた。

「発表」に限らず、「会話」においても、豊富な語彙と豊かな文法的表現力を身につけることが英語を話す上で極めて有効で、大切であることに疑いの余地はない。しかし、英語を読むこと、書くことに限定しても、EFL学習者がそれらを身につけるのに膨大な時間と労力を要することは、日韓語いずれの母語話者であれ認めるところであろう。それを目標にして一生涯努力を続けたとしても、殆どの人は達成出来ないというのが実情であるまいか。これに対して、実用性と学習の即効性を重要視するRCGの立場では「学習の最も初歩の段階で扱う知識と技術は可能な限り少なく簡素なものに限定される必要がある」(筆者ら2019: 28)という基本原則に拠って立つ。

学問ないし商業的な英語の発表を想定する記事や指南書で取り上げられる豊かな語彙と豊富な文例に

比べて、本稿で取り上げた具体的な表現は極めて限定的である。文法的な要素として扱われている内容も、出来合いの句と見なし得る要素を線状的に並べることに留め、緩やかな特徴付けをしているに過ぎない。それらは到って簡素で、使用例を豊富に提供するものとは言い難いが、そうであるがゆえに、これらの学習資料を扱うことは容易となり、EFL学習者にとって「覚えやすく、思い出しやすく、伝えやすく」なる<sup>29</sup>。

人前に出て英語で30秒ほど話すことを求められた際に、母語を用いる場合と大差ない様子で、英語だけで話し始め、聞き手を巻き込みながら経験や知識を共有することに成功し、その後、質問や意見を聞いて、それに対してそつなく応じるEFL学習者を見て、英語が上手だと思わない人は、英語の母語話者はもちろんのこと、他のEFL学習者の中にも決して多くは存在しまい。この程度の英語力とて、日韓語を母語とするEFL学習者にとっては、身に付ける価値の十分にある技能であることに異論を挟む余地はないと思われる。本稿でその実践と応用を例示したRCGは、その技能を獲得するのに大いに寄与すると信じる。

## 謝辞

英語の自然な例文を準備するにあたって相談に乗って下さったWalter Klinger先生、Martin Hawks先生に心よりお礼を申し上げる。ご教示頂いた情報や資料の理解ないし扱いに不正確な点があるとすれば、偏に筆者等の責任であることを申し添えておきたい。

## 参考文献

- Auer, Peter. 2009. On-line syntax: Thoughts on the temporality of spoken language. *Language Sciences* 31: 1-13.
- Barlow, Michael. 2000. Usage, blends, and grammar. Barlow, Michael and Suzanne Kemmer (eds.), *Usage-Based Models of Language*, 315-345. Stanford: CSLI publications.
- Brown, Penelope and Stephen C. Levinson. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Clancy, Patricia M., Sandra A. Thompson, Ryoko Suzuki, and Hongyin Tao. 1996. The

- conversational use of reactive tokens in English, Japanese, and Mandarin. *Journal of Pragmatics* 26: 355-387.
- Fauconnier, Gilles. 1994. *Mental Spaces: Aspects of Meaning Construction in Natural Language*. New York: Cambridge University Press.
- Givón, Talmy. 1985. Iconicity, isomorphism, and non-arbitrary coding in syntax. John Haiman (ed.), *Iconicity in Syntax*, 187-219. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Hopper, Paul J. 1998. Emergent grammar. Michael Tomasello (ed.), *The New Psychology of Language: Cognitive and Functional Approaches to Language Structure*, 155-175. Mahwah and London: Lawrence Erlbaum Associates.
- 井筒勝信・小熊猛・金容澤. 2019. How to start, go on, or stop in EFL Communication : 口頭による英語コミュニケーションの基礎を求めて. 『人間文化』 47: 23-36.
- Leech, Geoffrey. 1983. *Principles of Pragmatics*. London: Longman.
- Leech, Geoffrey and Jan Svartvik. 1994. *A Communicative Grammar of English* (2nd ed.). London and New York: Longman.
- Maynard, Douglas W. 1980. Placement of topic changes in conversation. *Semiotica* 30: 263-290.
- 文部科学省. 2018. 『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説』.
- Sakamoto, Nancy and Shiyo Sakamoto. 2004. *Polite Fictions in Collision: Why Japanese and Americans Seem Rude to Each Other*. Tokyo: Kinseido.
- Todd, Richard Watson. 2016. *Discourse Topics*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- West, Candace and Angela Garcia. 1988. Conversational shift work: A study of topical transitions between women and men. *Social Problems* 35: 551-575.

#### 参考資料

Real World English: agreement & disagreement, Macmillan Education ELT (<https://www.youtube.com/watch?v=S7wTMZQdZg>)

#### 註

- 1 文部科学省(2018: 22)でも、「話すこと」の領域は、「話すこと [やり取り]」と「話すこと [発表]」の二つに分けられている。
- 2 ここでの「簡単な発表」は、最大限の広義で用いられることに注意されたい。「乾杯のご発声」の前に「一言」や「皆さんに一言ご挨拶」、自己紹介に伴う自身の背景略説、講演者の紹介、新商品の宣伝、サービスの紹介など具体例は多岐に渡り、英語で after-dinner speech (日本語ではテーブルスピーチと称されるもの)や speech of thanks (お礼の一言)、あるいは elevator pitch などと呼ばれるものも含まれる。いわゆる opening speech (開会の辞)や closing speech (閉会の辞)も、手短かなものであれば、その例に該当するが、聴衆としての経験から、多くの場合は決して簡単な発表に留まらないのではないかという印象も禁じ得ない。
- 3 この様子は、韓国語においても大差はない。指名されて教室の前に出た生徒は、よほど「発表」に慣れているのでなければ、開口一番、高過ぎず、低すぎることもない声音で、*jeo...* という語用論的標識を口にすることが予想される。それを聞いた聴衆は、話者が話し始めるのだなと察知する。
- 4 韓国語においても同様に、話を続けていく中で、話し手が *eo...*, *jeo...*, *geuge...*, *mweo(yeoss)ji*, *mweoyeossdeora*, *mweoralgga(yo)...*, *issjanha(yo)geu...*, *mweonga...*, *geugeo(yo)...* のように語用論的標識を連鎖的もしくは頻繁に用い始めると、「発表」の話者としては著しく不適格であると見る判断に聴衆は傾きかねない。これに対し、「会話」においては、同じような発話連鎖を行なっても、発表においてほど低い評価を下されることはないであろう。また、会話や本論で言う「簡単な発表」では *eo...* を filler に用いてもさほど問題ないが、正式な(例えば学会などでの)発表ではやや無礼に響きかねないため、(*eu)m...* の方が用いられやすい。
- 5 これらは、*Uhm... well...*, *Uhm... so...*, *Uhm... OK...* のように、*uhm* の後に休止 (pause) がある方が自然であろう。
- 6 本稿で取り上げる具体的な表現は、その大半が以下の「出来合い」の表現で組み立てられる：  
*well; uhm; so; now; and; you know; I mean; what can I...?; how can I...?; say; say that; what was that?; let*

me...; OK; I'd like to...; Let me...; I think...; I'll...; I want to...; Do you know...?; some about...; Have you ever heard (about)...?; You may think it's...; It sounds like (it's); We[You] can imagine...; something like...; Doesn't it?; Isn't it?; Can't we?; when I was...; Here is...; Here we have...; It shows...; You can see that...; As you can see...; (it) has the largest[large(r)/small(er/est)] number of ...; (it) is followed by...; (it) goes[went] up[down]...; There is[was/has been] a(n)...; If we talk about...; When it comes to...; This made me know[find]...; That was the moment (that) I first knew...; That's all...; talk about; tell you; Thank you for...; sharing your...; I was (very) interested in your...; I enjoyed your...; You said...; something about...; You talked about...; Could you...?; Would you...?; You mentioned...; say that again?; repeat that?; You said that...; Is that...?; Are you saying that...?; Do you mean that...?; What does it mean?; explain what you mean?; What are you...?; What do you...?; mean by that?; want to say by that?; trying to say by that?; Why do you...?; Why can you...?; say that; I'm (just) wondering...; I was (just) wondering...; explain a (little) bit more about...?; hear a (little) bit more about...; I would like you to...; talk a (little) bit more about...; I think so too.; I (totally/partially/generally) agree.; I'm sorry but...; I don't (really) think so.; I have to...; (That's) because...; I could[can] understand your...; That's really interesting.; I hadn't thought about it that way; That's a good point.; I (can) see your point.; but I have... ; but I think...; you can look at it this way.; Your questions is...?; You're asking...?; It is[was/will/can(not)...]; I do [did/will/can (not)...]; Let's...

- 7 韓国語では、日本語の場合ほどイントネーションの違いによって発表者から感じ取れる意気込みの度合いが違って来るということはないようである。但し、引き伸ばして発せられる *jeo...* が低めよりは高めである方が僅かにその「意気込み」を感じやすくなるようである。
- 8 場合によっては *Now* も可能だが、これは既に話していて説明を加えるような場合に用いられやすい (better used when making a further explanation, p.c. Walter Klinger)。
- 9 中学生までは省くのも可という趣旨で (iii) と (iv) の *I think* を括弧に入れているが、省かずに用いる方が丁寧さも増し、大人の言葉遣いに響く

ので、高校生以降には省かない形がお勧めである。*I'm going to talk about...* も可能だが、話す内容を準備していたといったニュアンスを伴いやすいので、ここで想定される即興的な発表場面では提示しないことにした。上記の四表現は、日本語の *-nituite ohanasi-sasete-kudasai[itadaki(-tai-to-omoi)masu]*、*-nituite ohanasisi[hanasi]-tai-to-omoi-masu*、*-nituite ohanasisi-masu*、韓国語の *-edaehaeseo iyagi[yaegi]ha(e bo)-gess-seubnida*、*-edaehaeseo balpyoha-gess-seubnida* に概ね相当するが、(iii) と (iv) で *I think* を省くと、*-nituite hanasi-masu*、韓国語の *-edaehaeseo iyagi[yaegi] ha-iggeyo* 程度に響くとなぞらえてみれば違いが感じられるだろうか。なお、*-nituite happyoosimasu* は学校での発表のように響き、*-edaehaeseo iyagi[yaegi/balpyo] ha-go sip-seubnida* は単に自分の欲求を表現しているだけのように聞こえ、また *-edaehaeseo iyagi[yaegi] haeyo* は「について話しましょう」という勧誘の意味になるため、学会発表などの正式な場面では使われない。更に、*-gess* を用いずに *-edaehaeseo iyagi[yaegi] ha(e bo)-bnida*、*-edaehaeseo balpyoha-bnida* と言ってしまうと、動作主が話者ではなく三人称であると理解されて不自然な表現となり、*-edaehaeseo iyagi[yaegi/balpyo] ha-go sipda-go saenggagha-bnida* に至っては、*-go sipda-go saenggagha* という連鎖が「したいと思うと思う」のような意味的余剰性を示すため母語話者是用いない。

- 10 Todd (2016: 34) は、これら speech starters に相当する表現を「新しい話題の導入 (introductions of new topics)」の表現と見なし、“topic shift markers and phrases” の一つとして扱っている。
- 11 例えば、Leech (1983: 134) などを参照されたい。これは、Brown and Levinson (1987: 190) で言う「英語の *I* や *you* に当たる代名詞を避けること (“avoidance of the ‘I’ and ‘you’ pronouns”))」の表れの一つと見ることも出来よう。
- 12 これは、“positive politeness” (Brown and Levinson 1987) の一つの現れと考えることも出来る。
- 13 日本語と韓国語にも audience involver は見出される。*-wa gozonzidesuka*、*-tte kiita-koto(-ga) arimasuka* や *-(n)eun asi-bnigga [aseyo]*、*-(r)eul deureo bon jeog-i iss-seubnigga [isseoyo]* のような表現が挙げられる。二言語は英語ほど主語代名詞を用いないのが普通だが、*minasan-wa* や *yeoreobun-eun* を前置

きした方が audience involvement は高まるようである。ここにも英語の場合と同じ原理が読み取れる。

14 韓国語では, *chodeung*[jung/godeung/dae] *hagsaeng(-ieoss-deon)-sijeol-e* も可能だが文語的な表現で口語ではあまり用いない。また, *...myeon-jjeum jeon-e* は文法的には不可ではないが、あまり用いられない。興味深いことに、「30分ほど後に」は *30 bun hu jjeum-e* よりも、*30 bun jjeum hu-e* の方が自然である。

15 ここでは正書法の表記を取っているが、RCGの発想に基づけば、音韻的表記を用いて / (h) *wenái waz/* と表示される一つの句として認識されることが望ましい。また、改めて注意したいのは、これらの英語はいわば「小 [中] 学生 [子供] だった時 [頃]」のような日本語ではやや不自然な言い回しとなっており、「小 [中] 学生の時 [頃]」のような発想の表現ではないということである。興味深いことに、韓国語は「だった」に相当する (-ieoss-eul) と (-ieoss-deon) を伴うタイプと伴わないタイプのどちらも許容する。英語の *when I was seventeen* を直訳したような「17歳だった時に」がやや舌足らずな子供っぽい響きを持つように、(日本語を母語とする EFL 学習者から発せられやすい)「17歳の時」を直訳したような *in time of seventeen* は、大人の母語話者の発する英語ではない。興味深いことに韓国語では「17歳だった時に」に近い *17 sal ieoss-eul ddae* が可能であるにも関わらず、*17 sal ieoss-deon ddae* はあまり用いられない。

16 以下のようにいわゆる *-n(o)da* の語尾を用いると、絵本の読み聞かせではなく、口頭の説明として、一層自然に聞こえるかもしれない：  
店に入ってチョコレートを探すけど見つからないんです。それで店員に、「チョコレートはどこですか」と尋ねると、棚まで連れて行ってきて、「ここです」と言うんです。ところが、それはココアなんです。なんと。ココアなんか飲みたくありませんから、私は「ごめんなさい。これじゃないんです。私はチョコレートが食べたいんです」と言ったんです。すると、「あー、candy bar ね」と言って、食べるチョコレートのコーナーに案内してくれました。

17 韓国語では以下のように表現出来る：

*gage deureogaseo chokollis-eul chaja boass-neunde, an bo[mos jach-gess]-neun geo-yeoyo. geuraeseo jeomweonege "chokollis eodi isseoyo?" rago mureo boass-deoni, chokollis iss-neun seonban-ggaji deryeoga ju-myeonseo "yeogi-yeoyo" rago (mal)haesseoyo. hajiman geugeo-n kokoa-[yeoss-deon geo]yeoyo. jeon kokoa-reul masi-go sip-ji anha-seo, "joesongha-jiman jeo-neun chokollisba-reul meog-go sip-eundeyo" rago malhaesseoyo. geureoja, geu saram-eun, "a-, kaendiba!" rago malha-myeonseo, ggaemureo meog-neun chokollis-i iss-neun gos-euro deryeoga jueosseooyo.*

なお、*chaja boass-neude* の代わりに *chaja boass-jiman* は可能だが、*chaja bo-jiman* は三人称主語と解釈されるため不可である。また *"yeogi-yeoyo" rago(mal)haeyo.* のように現在形を用いるのは不自然である。

18 *The number of users of Facebook is by far larger than (that of) Twitter.* や *Facebook is far larger in (terms of) the number of users than Twitter.* のような表現は、学習者が自力で組み立てて用いるかもしれないが、範例としてはより英語らしい表現として *have* の構文を示すのが良からう。それに対して、*Facebook users surpass Twitter users in number.* や *Facebook users outnumber Twitter users.* は、英語力のある高校生ないしは大学生が「書くこと」を目的とする学習活動でもなければ導入不要であろう。

19 それゆえ、*It shows...* の代わりに *It sands for...* を導入するのは遅らせ、*It represents[indicates/reveals]...* などに到っては(「話すこと」を目的とする学習活動である限り)導入を見合わせても良からう。

20 同様に、小学生ないし中学生にとっては *increase/decrease* もやはり難しめの語に属するかもしれない。その場合は示す必要はない。

21 ここでは、*...hangug-eseo-neun eoneugeos-do Kakao Talk-mankeum[Kakao Talk-manhan] ingi-neun eobs-eoyo[seubnida]* も可能である。

22 同時に、最初の文は、*LINE and Twitter get [attract] more users than Facebook (does) in Japan, but in Korea, Kakao Talk gets[attracts] far more users than any of those (does).* のように動作動詞を用いる方がより英語らしい表現と言えるかもしれない。

23 このような話の結び方は、自らが得た教訓を

伝えるという点で、Maynard (1980: 273) が「格言を発する (producing “aphorism”)」または「格言めいたまとめを付け加える (adding an “aphoristic summary”)」と呼ぶもの、West and Garcia (1988: 559) が「格言めいた結論を導く (“drawing aphoristic conclusions”)」と呼んでいるものと本質的には同類であろう。

- 24 意味的な対立から言えば、speech starter に対して speech ender、talk opener に対して talk closer とするのが相応しいとする見方がある。本稿で想定する発表は、やや自信なさげに独話性の強い話 (speech) として始めるものの、やがて聴衆を巻き込んで、経験や知識の共有を通して一体感を高めることで、話 (talk) となったものを聴衆と共に締めくくる (close) という筋書きから、speech starter と talk closer という名称を選択する。opening/closing speech が会や式の参加者全員で始め・終わることを含意するように、opener には最初から聴衆も含めた全員で始めるニュアンスが感じられるため、speech opener は採用しない。
- 25 告白すれば、この formulation が持つ居丈高な印象を払拭することが出来ず、筆者らは用いることに抵抗を覚え続けて来た。例えば目上の先生の発表の後に、*Thank you for your interesting lecture.* と言うのはおこがましい気がしてならないのである。その点では、この後に挙げる *I was (very) interested in...、I enjoyed ...、Thank you for sharing...* などの formulation の方が幾分謙虚であるように感じられるのは、日韓語と英語が異なる “polite fiction” (Sakamoto and Sakamoto 2004) を想定しているからであろうか。
- 26 あるいは、*geugeos-edaehaeseo dasi han beon malsseum[seolmyeong]hae jusi-ji anh(-gess)-seubnigga?* となれば一層丁寧さが増す。
- 27 文法的には可能な *jeo-neun geureohge saenggaghaji anhseubnida、(jeo-neun) chanseong[donggeui] mos habnida* や *(jeo-neun) donggamha-ji mos habnida、(jeo-neun) donggamha-l su eobs-seubnida* は、否定的な語感が強過ぎるため、学習者にはお薦めし難い。
- 28 If you disagree with someone, neither of you will change your mind, a useful phrase is “Let’s agree to disagree.” This politely acknowledges both points of you and lets you move on. (Real World English: agreement & disagreement, Macmillan

Education ELT)

- 29 Givón (1985: 189) は、言語表現の使用を動機づけ、容易にする原理の一つ (iconicity meta-principle) を次のように特徴付ける。「覚えやすく、思い出やすく、伝えやすい」ことは、知識に留まらない使用に力点を置いた学習にとっても極めて重要である。

“All other things being equal, a coded experience is easier to store, retrieve, and communicate if the code is maximally isomorphic to the experience”. (条件が等しければ、表現される経験はそれと同形の言語形式で表現される方が (同型ではない形式で表現でされるよりも) 覚えやすく、思い出やすく、伝えやすい。)